

# 音楽科における Project-Based-Learning の取り組みについて

和歌山大学教育学部：菅道子（研究代表）、上野智子  
附属中学校：那須祐哉

## 1. はじめに（共同研究の趣旨と目的）

附属中学校音楽科では 2021（令和3）年度より、生徒主導の授業への転換を行い、「主体的に学習に取り組む態度」に焦点を当てた実践を行ってきた。少しでも多くの生徒に学習を自分の課題と捉えさせたいという思いからである。

本年 2022（令和4）年度取り組みを行なった第 3 学年は新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けた学年である。休校措置から中学校生活をスタートし、1年生の時には音楽の授業においてほとんど歌唱活動を行うことができなかった。また学校生活においても感染症対策のために班活動が制限されるなどコミュニケーションを取ったり、関係を気付いたりすることがしづらく、自分を表現する場面や手段が大きく制限されている状況にあった。第2学年時には歌唱活動を少しずつ再開していったが、変声期で声が出しにくい生徒が多かったことも相まって「前向きに歌おう」とする生徒は決して多いとは言えなかった。

しかし、生徒たちは決して音楽に対してネガティブな気持ちで向き合っているわけではない。鑑賞領域の授業では積極的に調べたり、考えたりする場面が多く見られ、休憩時には ICT 端末（iPad）を使って流行の音楽についてよく調べ学習に取り組んでいる。

これらを踏まえ、附属中学校音楽科の授業としては、本校の研究テーマとして取り組んでいるアメリカの学校「ハイテックハイ」が取り組んでいる Project-Based-Learning の実践を参考に、校内音楽会に向けてクラス単位で導入から音楽会当日に演奏発表するまでの過程を自分たちで進めていくような単元を計画した。

なお、上述した生徒の状況を改善するために、目標「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に加えて、以下のようなソフトスキル（非認知的能力）を生徒たちにつけることもねらいとして設定した。

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"><li>・前向きに音楽しようとする力。 ・発表する力、プレゼンテーションの力。</li><li>・試行錯誤する力。 ・粘り強く課題に取り組む力。</li><li>・協働的にみんなで作り上げていく力。 ・自分たちの思いを歌で発信する力。</li></ul> |
|---|

以上を踏まえ、本連携事業では、大学教員と中学校教員が連携し、「主体的に学習に取り組む態度」を育むための教材の扱い方、指導と評価の一体化など音楽科授業のあり方を検討することを目的として、題材「《HEIWA の鐘》」の思いを音楽で伝えよう」の授業づくりの共同研究を進めた。

## 2. 研究の経過

本年度の研究の経過は、表1の通りである。

表1 2022(令和4)年度の研究経過

月 日	概要
2022年 7月25日	楽曲教材としてのメッセージソングの取扱い方と生徒の取り組み方についてのカンファレンス
11月 4日	研究授業と協議(附属中学校研究協議会後に実施)
12月 2日	校内合唱大会の実践と終了後の意見交流

### 3.授業実践 題材名「《HEIWA の鐘》の思いを音楽で伝えよう」(研究授業)

#### (1)ねらい

本題材に至るまで、本学年の生徒は段階を踏んで自分たちが主体になって合唱活動に取り組んできた。

第2学年時に歌唱した《翼をください》(混声3部)(作詞:山上路夫、作曲:村井邦彦)では音取りを生徒たちが主になり運営できるようにした。ただし表現を考える部分については、教師が示したポイントについて表現の工夫を班活動で考え、全体に伝えて演奏に生かす指導を行なった。第3学年前期には《花》(同声2部)(作詞:武島羽衣、作曲:滝廉太郎)、《早春賦》(同声2部)(作詞:吉丸一昌、作曲:中田章)において音取りに加えて、表現の部分についても生徒たちが主になり自由に考え、歌い方を工夫して表現できるような学習活動を準備した。

本題材で取り上げる《HEIWA の鐘》(作詞・作曲:仲里幸広)は、12月2日(金)に行われる校内音楽会での発表曲として取り組んだ。《HEIWA の鐘》の学習では、以下①～④の形で導入から仕上げまでのほとんどを生徒たちが運営していくように学習活動を組織し、前述のソフト

- ①音取りの段階から完成まで、生徒が主体的に運営する。
- ②取り組む曲について調べてまとめる活動を取り入れる。
- ③相互評価をする場面を設定して、自分たちの演奏を振り返る場面を設定する。
- ④校内音楽会では専門家の先生の講評をいただく。

スキルを育成することを目指した。

本時として取り上げる第4時は上記②の学習活動である。生徒たちが合唱曲に前向きになりにくい要因として、曲のことがよく分からない、自分たちの生活に溢れる音楽との乖離があることがあげられる。

そこで、一通り3部合唱ができるようになった段階で教師から曲について考える場面を設定し、理解を深める中で、曲に対して親しみ、第6時以降の曲を仕上げていく段階でさらに前向きな気持ちで合唱に取り組もうとする態度につなげようと考えた。

第4・5時では The Beatles の代表曲である《Imagine》(作詞・作曲:ジョン・レノン、オノ・ヨーコ)について取り扱ったのち、同じくメッセージ性の強い《HEIWA の鐘》の歌詞と音楽を形作っている要素の繋がりについて考えることで、《HEIWA の鐘》の内容がシリアスなものであるにも関わらず明るい曲調で作曲された意味を捉えさせたい。

なお、《HEIWA の鐘》の曲は昨年度の3年生の演奏を聴いていたこともあり、以前より「すごくカッコいい曲」「自分たちも歌ってみたい」「曲の雰囲気への親近感が湧く」といつもよりも生徒たちの曲に対する思い入れが強い。こういったことから、本題材の目標を達成するのに《HEIWA の鐘》が最適な曲であると考え、取り扱うこととした。

## (2) 学習計画

【第1時】曲の決定(課題曲+選択曲)
【第2時】各パートで音取りを行う。(パート練習)
【第3時】全パートで合わせて、ハーモニーを完成させる。
【第4・5時】曲に込められた思い、作曲の背景や反戦歌等についてまとめ、発表する。〈本時〉
【第6時】前時までの調べ学習を基に、どのような表現をしたいか考える。
【第7時】前時に考えた表現をするために、どのように歌うか試行錯誤する。
【第8時】繰り返し練習し、演奏の完成度を高める。
【第9時】体育館に学年全体で集まり、他のクラスの演奏を聴く。(学級対抗歌合戦)
【第10時】前時の発表を踏まえて、演奏を捉え直す。
【第11時】校内音楽会で発表する。(全校生徒、教職員、審査員、保護者)
【第12時】ふりかえりを行う。

## (3) 本時の目標

《Imagine》を聴き、曲に込められた思いと音楽の特徴について考える。

## (4) 本時の展開(第4時/全12時)

○学習活動	・指導上の留意点 *評価
【導入】 ○《HEIWA の鐘》を歌う。	・ピアノ伴奏に合わせて歌う。
【展開】 ○反戦歌・メッセージソングとは何かを知る。  ○《Imagine》を聴く。  ○歌詞が伝えたいことと音楽の特徴について考える。(個人→グループ) ○全体で意見を共有する。	・メッセージソング=聞き手に伝えたい内容を盛り込んだ曲であることを押さえる。  ・最初は何も見ずに聴かせ大まかに曲想を捉えた後、歌詞・楽譜を見て聴かせる。  ・歌詞が伝えたいことと音楽の特徴を分けて板書する。 ・音楽の特徴は、音楽を形作っている要素のいずれに関するかを確認しながら進める。 *「Imagine」を聴き、曲に込められた思いと音楽の特徴について考えられたか。
【まとめ】 ○まとめ ○次時予告	・歌詞が伝えたいことと音楽の特徴がどのようにつながっているかを押さえる。

## 4. 授業実践後のカンファレンスの成果と課題

研究授業終了後にカンファレンスならびに校内音楽会後に意見交換を行った。それらを踏まえ

て前述に掲げたソフトスキルの育ちやその力の発揮の仕方等について次のように考察した。

ソフトスキル	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前向きに音楽しようとする力。</li> <li>・協働的にみんなで作り上げていく力。</li> </ul>
--------	---

上記2点のソフトスキルについては、教師主導で授業を行う場合よりも、自分たちでやらなければならない適度な緊張感もあり、意欲的に参加しようとする生徒がほとんどであった。

(1)-①の活動については、定期的に Google フォームを使って自分たちの演奏に対してコメントを入力し、クラス単位で共有できるようにしたり、(1)-③の活動については他の学級の演奏を聴いて相互にコメントしたりすることで、自分たちの良さやもっとより良い演奏をするためにどうすれば良いかが明確になり意欲につながっていったと考えられた。

またこのことから音楽会においての専門家がくださる意見から学ぼうという姿勢が例年よりも強く感じられた((1)-④)。

曲想にあった表現を考える際にも、以前であれば「f」だから「強く」など機械的だったものから、少しずつではあるが歌詞の意味と音楽の特徴をつなげて考えられるようになってきた。

一方で、本時の大きなねらいであった曲への理解の内容を深めるためには音楽的な視点から分析的に捉える指導をすると可能性が広がったのではないかとの意見が出された。例えば《Imagine》が優しい曲想に聴こえるのはなぜかという発問を設定したならば、3度の狭い音程の中で進行する旋律があたかも語りかけている様子を表現しているといった意見、フレーズごとの休符が相手に想像させるような間を作り出しているといった意見が出できたのではないかとの指摘であった。すことができたのではないかとの意見が出された。語りかけるような感じになっているなどに目を。おそらく歌詞と音楽の関係を生徒たちが自分たちだけの力で見つけるのは容易ではなく、また学級全体で共有するためにも教師からの発問によるある程度方向づけが必要であった((1)-②)

ソフトスキル	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表する力、プレゼンテーションの力。</li> <li>・自分たちの思いを歌で発信する力。</li> <li>・試行錯誤する力。</li> <li>・粘り強く課題に取り組む力。</li> </ul>
--------	---

上記4点については、発表する機会を多く設けたことで、思いを伝えることに対するハードルは下がり、意欲的に活動できるようになってきた。

一方課題としては、技能面の拙さから思ったように自分たちの考えた工夫を歌として演奏できず、伸び悩んでいる状況が生まれたことである。このことが粘り強く取り組むことを阻害してしまった部分がある。今回の実践では知識や主体的に取り組むことに偏った面があり、生徒の実感を伴うところまで到達できなかったことに起因する。これらを改善するためには他者と繋がるような活動や音楽の技能面での基礎的な力をつけられるような活動などを扱う常時活動が重要であると思われる。また音楽の基礎的な力が備わることでさらに試行錯誤し、粘り強く取り組むことに繋がっていくと考えられる。